

沖縄歴史の散歩道

御嶽を歩く①

沖縄復帰50周年企画として、「群星」紙上及び沖縄総合事務局ウェブサイト「オキナワンパールズ」にて歴史研究家の上里隆史氏が沖縄の歴史文化の魅力を紹介します。 <https://www.okinawan-pearls.go.jp/>



首里城公園内の首里森御嶽

「御嶽(うたき)」は沖縄独特の聖なる場所、拝所として知られています。各集落には必ず1つはあり、現在でも信仰の対象として大切にされています。御嶽は沖縄県内に約二千は存在すると言われ、大半は小さな祠や自然の石が置いてあるか、何もない広場だったりします。立派なお堂や神像があるわけではありません。かつて、御嶽を訪れた芸術家の岡本太郎が「何もないことの眩暈(めまい)」と評したのは有名です。

こうした御嶽の様相などから沖縄の宗教文化は素朴な自然崇拜が特徴として挙げられたりもします。確かにそれは間違いではありませんが、当時の沖縄の人々が持っていた宗教的な世界観全体の方から御嶽を見ていく必要があります。

沖縄の信仰世界は大きく分けて①他界信仰(ニライカナイ信仰)、②女性信仰(オナリ神信仰)、③御嶽信仰から成り立っています。①の他界信仰とは、人間の住む現実世界とは別に神々などが住む異世界があり、それが東方海上にあると考えられた「ニライカナイ」という世界です。神々や霊的なパワー(セヂといいます)、災厄など様々なものがこの世界からやって来るといいます。②の女性信仰とは、女性には霊的な力が備わっていて、他界から来たパワーは女性を受取り、男性に分け与えるという考えです。沖縄でノロという神官が女性な

のはこうした理由があります。そして③の御嶽信仰は、ニライカナイの神々やパワーが現実世界に降臨するポイント、中継基地局のようなものとする考えです。この3つの要素が組み合わさった世界観があったわけです。

このような世界観で生み出された琉球の創世神話では、女性の創世神「アマミキヨ」が沖縄の島々、そして「七嶽」を創ったとされています。それが①安須森(あしむい)御嶽(国頭村)、②今帰仁の金比屋武(かなひやん)と斎場(せーふあー)御嶽(南城市)、④敷薩(やぶさつ)の浦原(南城市)、⑤玉城のアマツツ(南城市)、⑥久高島のクボウ御嶽(南城市)、⑦首里森(すいむい)・真玉森(まだまむい)御嶽(那覇市)です。数ある御嶽の中でも特に格式の高い場所が、南城市に



今帰仁の金比屋武

上里 隆史(うえざと・たかし)

琉球史研究家。内閣府地域活性化伝道師。法政大学沖縄文化研究所研究員。早稲田大学大学院修士課程修了。著書に『琉球という国があった』(福音館書店、2020年)、『海の王国・琉球』(ポーターインク、2018年)、『マンガ沖縄・琉球の歴史』(河出書房新社、2016年)、『尚氏と首里城』(吉川弘文館、2015年)など。NHKドラマ「テンペスト」の時代考証を担当。



玉城のアマツツ

集中しているのはニライカナイに近い東方にある立地が影響しているとみられます。なお一般に琉球最高の聖地とされる斎場御嶽ですが、正確には「最高聖地の一つ」と表現したほうが適切です。そうすると、首里森・真玉森御嶽を擁する首里城も「最高聖地」といえます。